

8月7日（火）

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 ピーター マクミランさんWS 『阿不幾集』解釈—型と共同体の美意識—

1,7回目のご来館

マクミランさん7回目のご来館では、和歌を専門とする小山順子先生（京都女子大学教授）をお招きし、前回に引き続き卷子本『阿不幾集』あふぎしゅうについてのワークショップを行いました。



2,和歌についてのワークショップ

ワークショップでは、出典がわからなかったり、絵と和歌との関連性がわかりにくい作品をとりあげ、先行研究をふまえながら解釈を検討しました。

扱った和歌は以下の5首です。

- ・ 風もよし雲のけしきもよかりけり かのつの舟の出でやすらん
- ・ さ夜更けてとがむる犬の一声を 人待つ方に聞くぞうれしき
- ・ 蜘蛛の家に荒れたる駒はつなぐとも 二道かくる人はたのまじ
- ・ 着しといふ袴いくのに裁ちぬらん たかばかりこそ恨みなりけれ
- ・ 我が恋は淀の川瀬のつなぎこひ 身をも心にまかせざりけり



3,思い起こす場所

「風もよし雲のけしきもよかりけり かのつの舟の出でやすらん」。

ここでは漢字をあてていますが、『阿不幾集』にはすべてひらがな

8月7日（火）

で記されたこの歌。「かのつのふね」はどのように読めばよいのかというところから議論が始まりました。

「つのふね」という語で辞書をひいても該当する項目がないのですが、対応する扇の絵には鹿の角で作った舟が描かれており、「つのふね」で一語として解釈するのは良いのではないかとのこと。

小山先生からは、「彼の津の舟（＝あの津の舟）」を「鹿の角舟」へと転化して扇絵に描かれたのではないかとお考えが示されました。鹿の角の舟という発想がとてもお洒落な絵ですね。



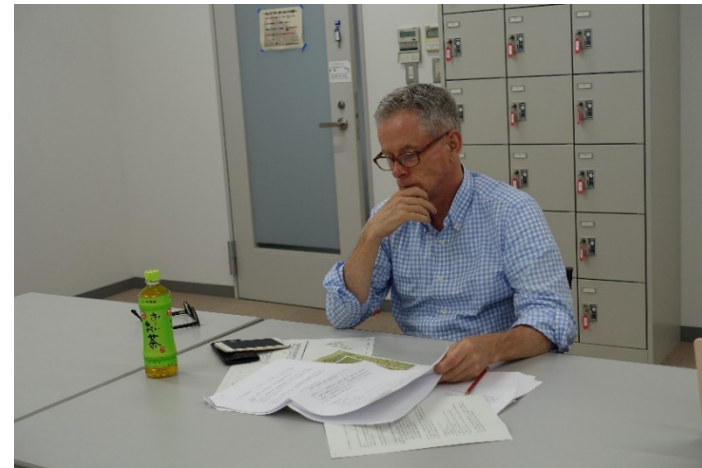
それでは「彼の津」は具体的にどこを指しているのでしょうか。

津から舟が出るという表現は、額田王によって詠まれた「熟田津尔ニキタツニ 船乗世武登フナノリセムト 月待者ツキマテバ 潮毛可奈比沼シホモカナヒヌ 今者許芸乞菜イマハコギコナ」（『万葉集』卷一8）という有名な歌と共通しています。この歌は斉明天皇の代作として額田王が作ったと言われており、「熟田津」＝「斉明天皇が船出をした地」というイメージがあったと考えられるものの、この下の句だけで熟田津を連想するとは考えにくいので、遠く離れた津

から船出しようとしている旅人のことを想像し、平穩に出立できることを祈る歌であると一般的な解釈をするのが良いのではないかと小山先生。

歌の最後の「らん」は推量の助動詞で、現在目の前で起こっていないことについて思い巡らせる時に使われます。誰か大切な人が今まきに出航しようとしている時、遠く離れた土地から無事を祈っている情景が浮かびます。

小山先生は「風もよい。雲の様子もよいのだなあ。あの津では舟が今頃出ているだろう」と訳されました。



ところで「かの」は一般的に「あの」などと現代語訳されますが、英訳の場合「that」になるのでしょうか。

8月7日（火）

マクミランさんによると、「that」はとても遠い距離を感じさせる表現で、自分とは関係のない場所を指すイメージがあるそうです。その場所であることが重要である場合、「at+場所」で場所を強調するそうですが、「かの」とは少し違う気がします。

日本語で「あの町」などという、思い出がある場所を指すイメージがあります。誰かに語りかける時に「あの」を使うと、その人と共通の思い出があるのだな、と解釈されます。

親しみ深い場所、慕わしい場所であることを英語で示すためには「my love」のような表現が必要ではないかとマクミランさんはおっしゃいました。

4, 絵であそぶ

「着しといふ袴いくのに裁ちぬらん たかばかりこそ恨みなりけれ」。「着る」「袴」「幾幅」「裏見」と縁語が続く一首です。

「たかはかり」は普通和歌では「竹葉刈り」を指すことが多いそうですが、ここでは着物や裁縫に関する語が多く用いられていることや、俳諧風の内容を持っていることから「竹量たかばかり（=竹で作った物差し）」という裁縫道具の意味でとるのが良いのではとのことでした。

これらを踏まえて小山先生は、「着たという袴をどれくらいの幅に裁断してしまったのだろうか。竹で作ったものさしこそが恨めしいものだ（竹量だけが袴の裏を見たのだなあ）」と訳を示されました。恋人になれなかった男の恨みを詠んだ歌でしょうか。恋愛の歌ではありませんが、言葉遊びの面白さが全面に出た歌です。

こういった遊びの要素は絵にもあり、袴のとなりに雉を描き「着し」をあらわしているようです。

この雉の絵の意味はなかなか解けず、解釈できたときには思わず歓声があがりました。



5, 邪魔される恋のロマン

「さ夜更けてとがむる犬の一声を 人待つ方に聞くぞうれしき」について小山先生は、「夜が更けて、侵入者を咎めて吠える犬の一声を、恋人を待っている方角に聞くのは嬉しいものですよ」と現代語訳されました。

小山先生によると、犬はあまり和歌には登場しないのだとか。和

8月7日（火）

歌でかすかな声、やわらかい声を愛でるといふ美意識があるので、大きな鳴き声を立てる犬はふさわしくないのではと教えてくださいました。

家を護って吠える犬のイメージは、漢詩から来たのではないかとのこと。『和漢朗詠集』に「家を守る一犬は人を迎へて吠ゆ 野に放てる群牛は犢を引いて休む」という例があり、日本の文芸で犬が登場する場合はこのイメージに従っているのです。

『源氏物語』にも「夜はいたく更けゆくに、このもの咎めする犬の声絶えず、人々追ひ避けなどするに……」

（浮舟）という表現が見られます。これはひそかに浮舟のもとを訪れた句宮が、護衛の厳しさに泣く泣く帰る場面です。犬の声は忍んで来た句宮を驚かせ、心を弱らせたことでしょう。緊張感ある場面で恋人を引き裂く存在として巧みに使われています。

『阿不幾集』の歌は女性の視点から詠まれており、犬の声で恋しい人が来たことを知り、誰かに咎められないかと緊張しながらも楽しみに待つ様が浮かびます。

マクミランさんは、恋路を邪魔される情景をロマンティックに詠



んだ歌ですねと感じ入っておられました。

6, 型と共同体の美意識／現代で和歌を鑑賞する意味

先に述べたように、和歌では詠まれるべきもの、美しいと愛でられるべきものが決まっています。

たとえばいくら桜が嫌いな人でも、春には桜の美しさを詠むものですし、鳥より犬の声が心地よいと感じる人でも、ほととぎすの声を待ち遠しいと詠むものです。和歌としてふさわしいかふさわしくないかが大切なのです。

マクミランさんは、このような和歌の美意識とは何に基づくのかということに強い関心を抱いておられます。

和歌や茶道といった日本の伝統的な文芸、芸術は、共同体の美意識を重んじます。大勢の人が美しいと思うものごと、つまり美意識最大公約数が「型」であり、それは日本人の歴史的な美意識（アイデンティティ）とも言うことができます。

和歌では、皆が共通して詠むべき内容やイメージのことを「本意」というので、和歌を学ぶ時には本意を大切にしないと歌論書にあるということを、小山先生が教えてくださいました。これは、共同体の美意識を学びなさいということです。

こういった伝統に対して、現代短歌では自分の心や感性を詠み、個性が重視され、一見型を大切にすると和歌の世界は窮屈なものにも

8月7日（火）

見えますが、果たして本当にそうなのでしょうか。

マクミランさんや小山先生は、和歌を共同体におけるコミュニケーションのひとつと考えておられます。同じ美意識をベースとすることで、仲間達と同じ時間や空間を楽しむことができるのです。また、袴と雉の絵のような遊びは、共通の世界観をもとにしたお洒落なたしなみということができるでしょう。

こいったお話を聞きながら、私は江戸時代に広がった雅と俗の概念について思い起こしました。

江戸時代になると多くの新興文芸が生まれ、流行しますが、昔からある美意識が覆されたわけではありません。古典は古典として、揺るがない価値観を保っており、古典文芸や芸能のことを「雅」と称します。江戸時代の人たちは、「雅」の世界への深いリスペクトを抱きつつ、それをもとに新しい「俗」の世界で遊んだのです。

このように見ると、共通の感性や教養があることで、共同体の中で人と深く関わることができたり、新しい遊びを生み出すことができることがわかります。共同体とは切り離せない「型」があることで、豊かな世界が広がっており、それは日本の文化に深く根付いています。

マクミランさんは和歌を現代に受け継ぐ意味について、現代の日本人が自分たちのアイデンティティについて考えることに繋がると信じている、と語ってくださいました。

